

紀 要

第 22 号

2009.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

湖南省岩瀬谷A1・A2号墳実測調査報告

辻川 哲朗・堀 真人

1. はじめに

平成20年度に湖南省岩瀬谷古墳群において、(仮称)大砂川補助通常砂防工事が計画され、それに伴い試掘調査が実施された。試掘調査では確実な古墳の存在は確認されなかったものの、周辺を踏査したところ、古墳群内で遺存状態が比較的良好な横穴式石室が開口する古墳の存在を確認した。

甲賀郡の横穴式石室については、先に述べたように甲賀市域の事例の資料化が進められている。しかし、隣接する湖南省域の横穴式石室については若干の調査事例があるものの、その様相が十分に把握されているとはいえない。

そこで、横穴式石室墳2基を対象として墳丘と石室の実測調査を実施することにした。本稿はその調査成果を報告することを目的とするものである。

なお、本稿の執筆は堀と辻川が分担し、それぞれの文責は文中に示している。(辻川)

2. 岩瀬谷古墳群について(図1・2)

2.1 従来の認識

岩瀬谷古墳群は湖南省正福寺地先に所在する。『平成13年度滋賀県遺跡地図』によると、横穴式石室を備えた古墳時代後期の円墳17基が確認されている⁽¹⁾。しかし、今回の踏査で確認できたのは8基であった。

2.2 古墳群の構成

古墳群は大砂川の左右両岸の丘陵斜面に点在している。ここでは分布状況からA～Dの4支群に分けて記述する。

A支群 A支群は大砂川左岸の丘陵先端部付近に位置する一群である。古墳群中では最も低位側に位置するグループであり、現況では3基を確認した。このうちの低位側のA1号墳と高位側のA2号墳は横穴式石室が開口しており、今回の実測調査対象としたものである。両墳の間には石材が露出した箇所があり、古墳である可能性がある(A3号墳)。

B支群 B支群はA支群から約90m上流側の左岸丘陵斜面に位置する。B1号墳1基からなる。半壊状況の石室が露呈している。石室は南側へ開口するもので、天井石の隙間から奥壁付近の内部をうかがうことができる。墳丘は流出が著しく、墳形・規模は判然としない。

C支群 C支群はB支群からさらに上流側へ約130mさかのぼった右岸丘陵斜面に位置する。現状ではC1号墳のみが確認されている。

C1号墳はD支群の3基から下流側に離れた丘陵端部に位置する。墳丘は流失が著しく、墳形・規模は判然としない。石室が開口しているけれども、破損が著しく、構造は不明である。

D支群 D支群はC支群から上流側へ約50mさかのぼった右岸丘陵斜面に位置する。現状では3基が確認された(D1～3号墳)。

D1号墳は左片袖式の横穴式石室が東側へ開口する。石室は大半が土砂で埋没しており、内部へ進入することはできない。入口からの観察では比較的大型の石室のようである。墳丘は流失が著しく、墳形・規模は判然としない。



図1 岩瀬谷古墳群位置図(S=1/25,000)

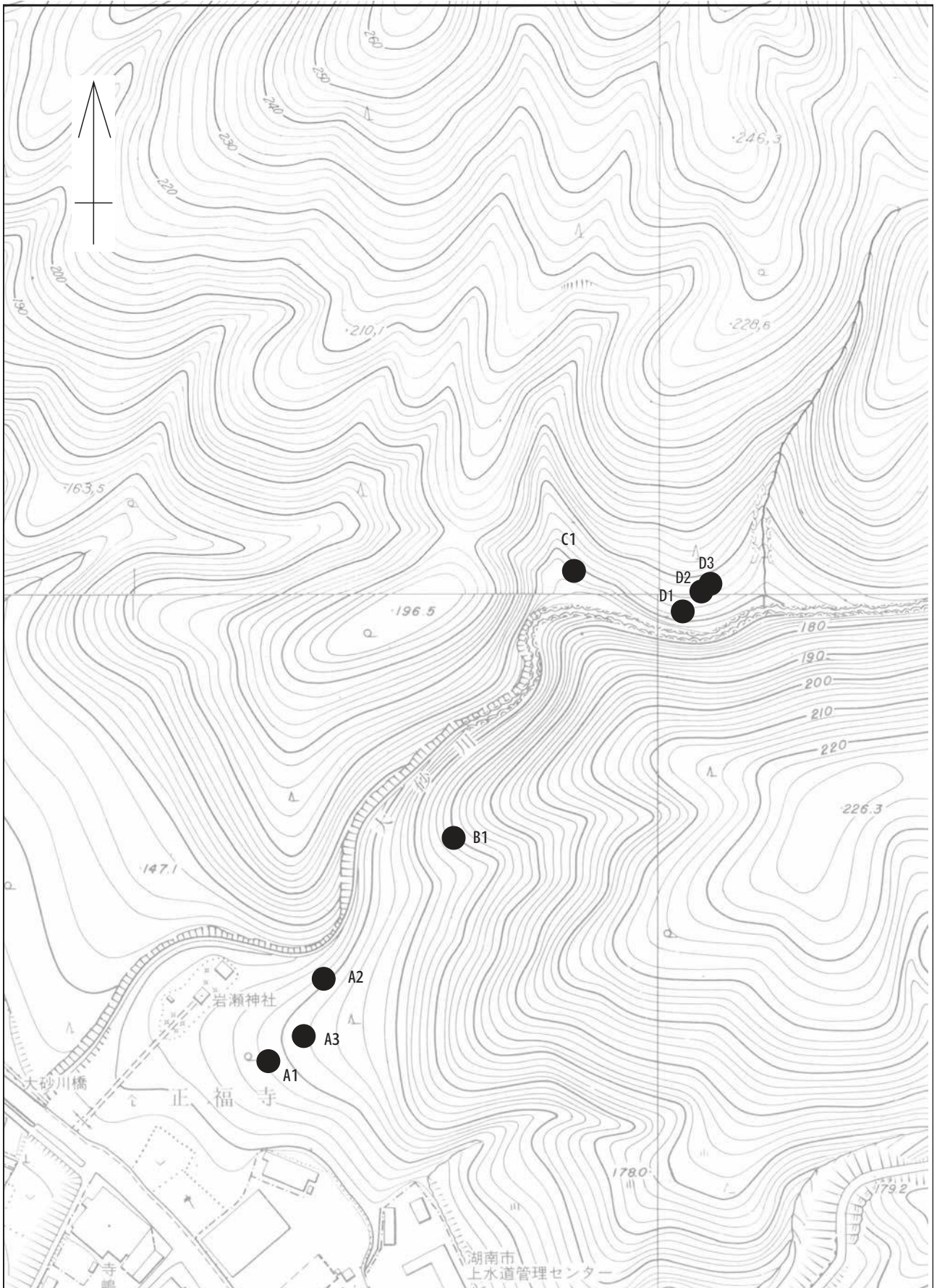


図2 岩瀨谷古墳群分布図(S=1/2,500)

D 2号墳は墳丘が流出し、石室が露出している。石室は両袖式の横穴式石室であり、東側へ開口する。

D 3号墳はD 2号墳の北東側に隣接する。横穴式石室の奥壁部分が露呈している。墳丘は流出しており、墳形・規模は不明である⁽²⁾。(辻川)

3. A1号墳 (図3・4)⁽³⁾

3.1 位置

群中でもっとも南側の標高の低い地点に位置する古墳である。南側に延びる低い小さな尾根の端部で、標高は147mを測る。

3.2 墳丘

墳丘は、西側を後世の開墾・植林により大きく削平されているものの、東側の遺存状態は比較的良好である。墳丘

は直径約12mの円墳に復元できる。墳丘高は現況で約1.5mを測る。墳丘の背面を掘削し、尾根と切り離しを行っている様子がうかがわれる。

3.3 石室

平面形態 南西方向に開口する横穴式石室である。袖部は土砂に埋没しているため視認できないが、ピンポールによる触診から左片袖式であると推定される。石室の主軸はN-46°-Eである。

遺存状況 玄室の北東部2/3程度が確認できるのみである。南西側に位置する玄門部・袖部および羨道側壁部は土砂に埋もれているものとみられる。現況の石室開口部（以後、開口部とする）付近に大型の石材がみつめられる。これは玄室南西側の天井石が崩落したものと考えられる。また、西側に石材が散乱している状況が認められる。これら

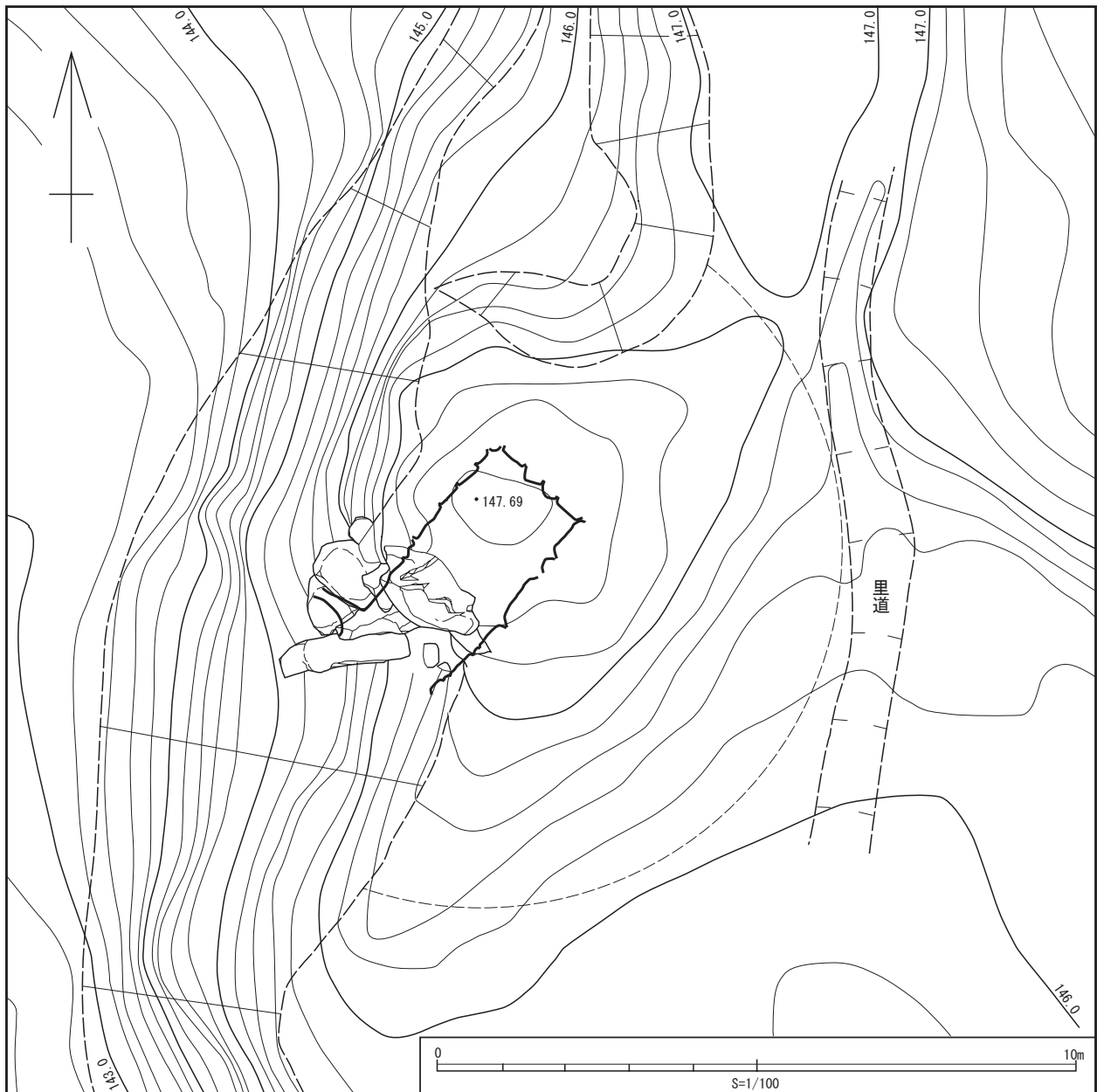


図3 岩瀬谷A1号墳墳丘実測図

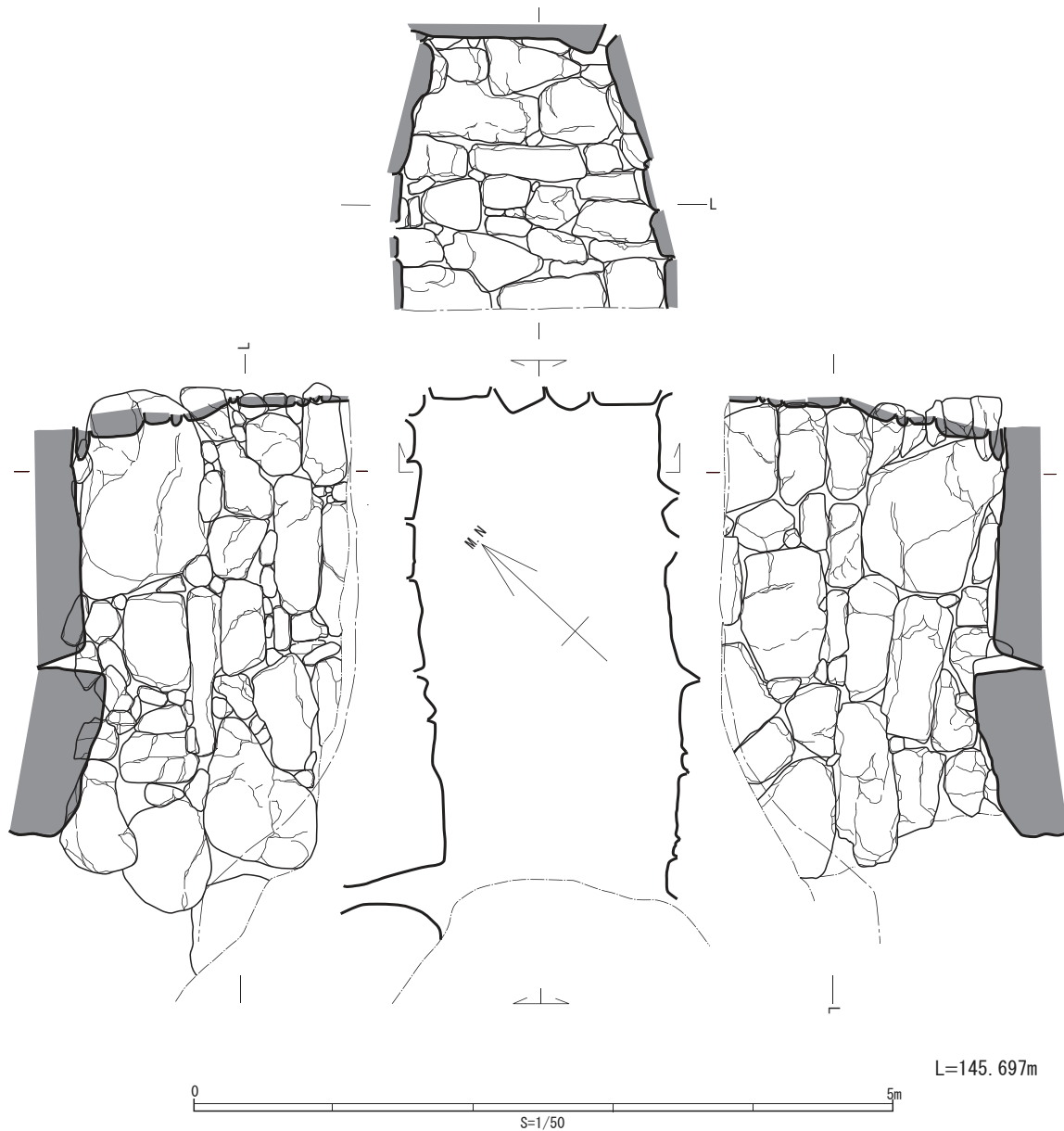


図4 岩瀬谷A1号墳石室実測図

は玄室の右側壁の開口部側と羨道部の右側壁の一部と考えられ、墳丘西側の削平とそれに伴う土砂の滑落によって石材が崩落したと考えられる。石室の残存部分では歪みや石材の崩落が認められず、残存部分に限定すれば遺存状況は良い。

各部法量 現状での石室の規模は玄室長4 m（右側壁）、同3.4 m（左側壁）、玄室幅1.9 m（奥壁）、同1.7 m（開口部付近）、玄室高1.9 m以上（奥壁）を測る。奥壁付近でのピンポールによる触診で奥壁の石材および硬化面が確認できることから、本来の床面は現況より0.3 m下層に存在すると判断される。

玄室 以下、壁面構成について奥壁・左右側壁・天井の順に記述する。

奥壁は6～7段積みで、扁平な石材を横方向に意識して

使用している。断面形は台形を呈し、上部に向かってやや窄み加減である。

左右側壁は6～7段積みで、扁平な石材を横方向に意識して使用している。幅0.5～1.2 m、高さ0.2～0.3 cmの石材を多用し、隙間を小ぶりの石材で充填している様子がうかがわれる。ただし、奥壁同様基準線（Lライン）の上0.4 m付近に横方向の目地が確認でき、この目地を境に上部では方形もしくは不定形の大型の石材に変化している。特に左右両壁には、奥壁側最上段の同じ位置に1.2～1.5 m×1 m程度の大型石材を使用しており、共通した壁面構成といえる。縦方向の目地は確認できない。

天井は平天井で、2石残存している。奥壁側の石材は奥行きが1.6 m以上を測り、玄門側の石材と比較して大型の石材を使用している。この2石とも表面には大きな凹凸が

認められる。

3.4 小 結

本石室に関して注目されるのは、奥壁・左右側壁を通して共通の横方向の目地が確認でき、それが石室構築時の作業工程を示していると考えられることである。また、目地のとおりは奥壁・左側壁が直線的に通るのに対し、右側壁ではやや乱れがみられる。さらに、石材の間に充填される小石材も奥壁・左側壁に比して右側壁の方が顕著である。これらは奥壁・左側壁と右側壁の構築過程における差異を表している可能性がある。(堀)

4. A2号墳 (図5・6)

4.1 位 置

A1号墳は岩瀬神社本殿の西南側約40m付近に位置する。周辺には平坦面がみとめられる。これらは田畑等による人工的改変によるものと考えられる。標高は約148mである。

4.2 墳 丘

墳形は流出が著しく、墳形・規模は不明である。表面観察によるかぎり列石・葺石・埴輪等の外表施設は確認できなかった。

4.3 石 室

平面形態 左片袖式の横穴式石室である。主軸をN-62°-Eにとり、西南西側へ開口する。

遺存状況 石室は羨道の一部を除いてほぼ完存する。

各部法量 石室各部の法量は石室全長約3.1m、玄室長約2.1m (左側壁)・同約2.3m (右側壁)、玄室幅約1.7m (奥壁部)・同約1.5m (玄門部)・玄門幅約1.0m、玄室高約1.6m (奥壁部)・同約1.2m (玄門部)、羨道長約1.0m (右側壁)・同約0.8m (左側壁)、羨道幅約0.9m、羨道高約0.7～0.9mである。

玄 室 以下、壁面構成について奥壁・右側壁・左側壁・天井の順に記述する。

奥壁は扁平な石材をヨコ使いによって積み上げている。目地ラインからみて、積み上げ段数は最大で9段分が確認できた。目地ラインはほぼ水平方向である。石材は長軸約0.4～0.6m程度・短軸約0.2m前後のものを主体としており、総じて整った印象を受ける。

右側壁は羨道側で一部の石材を欠失することや、複数段にわたる石材が認められることから、目地のラインは断続的であるものの、おおむね4段程度の積み上げを想定することができる。奥壁部との関係からみて、現状での最下段を基底石とはみなしがたいので、当初の積み上げは5段程度であったと想定できる。断面形をみると、現状での床面から1.3m程度 (奥壁側) をほぼ直立気味に積み上げた後、それより上部は石材を持ち送り気味に据えている。石材は長軸0.5～1m程度を測る例が多く、奥壁に比してやや大ぶりの石材を用いる傾向が看取できる。石材の据え方は大半がヨコ使いであるけれども、一部にタテ使いする例があ

る。さらに、それら石材の間を拳大程度の石材で充填している。

左側壁も一部について石材の抜け落ちや、土圧による石材のはり出しがみとめられるものの、おおむね完存するといつてよい。目地については右側壁と同様であり、5段程度の積み上げを確認できた。断面形は下半部を直立気味に積み上げ、上半部は石材を持ち送り気味に据えている。石材は長軸0.5～1m程度であり、右側壁同様に奥壁よりやや大型の石材を用いる傾向がある。その大半はヨコ使いによって積まれている。それらの中には拳大程度の石材で充填される。

天井は平天井であり、2石からなる。いずれも主軸方向で1～1.8m程度を測る大型の石材である。

袖 玄室平面での袖の張り出しは約0.5m程度である。長軸0.8～0.9m程度の石材をヨコ使いによって少なくとも3段に積み上げている。

4.4 小 結

本石室の時期については石室構造から判断するしかない。使用される石材がA1号墳に比して小ぶりであることや、袖が複数段によって構成されることなどに基くと、A1号墳に先行する可能性を指摘しておきたい。

(辻川)

5. おわりに

以上、岩瀬谷古墳群中の横穴式石室墳2基について、墳丘・石室実測調査の結果を述べてきた。

今回は岩瀬谷古墳群中の石室の一部を対象とした実測調査の報告であり、提示できなかった残余の石室については今後の発掘調査のなかで実測調査が実施される予定である。

また、石室の位置づけについては、周辺の石室事例を含めて当該地域の石室の展開過程を検討するなかで、改めて評価していくことを期して、本報告を終えることにしたい。

(辻川・堀)

(つじかわ てつろう・ほり まさと)

註

- (1) 滋賀県教育委員会編『平成13年度滋賀県遺跡地図』2003年
- (2) なお、石室が開口するC・D支群についても実測調査を行うべきではあるけれども、C・D支群については砂防工事に伴う本調査の発掘調査対象にあたっており、実測が実施される予定であるので、今回は対象から除外した。
- (3) 以下の各章の石室記述における玄室左右側壁の呼び分けは奥壁から羨道方向をみて左右を示している。

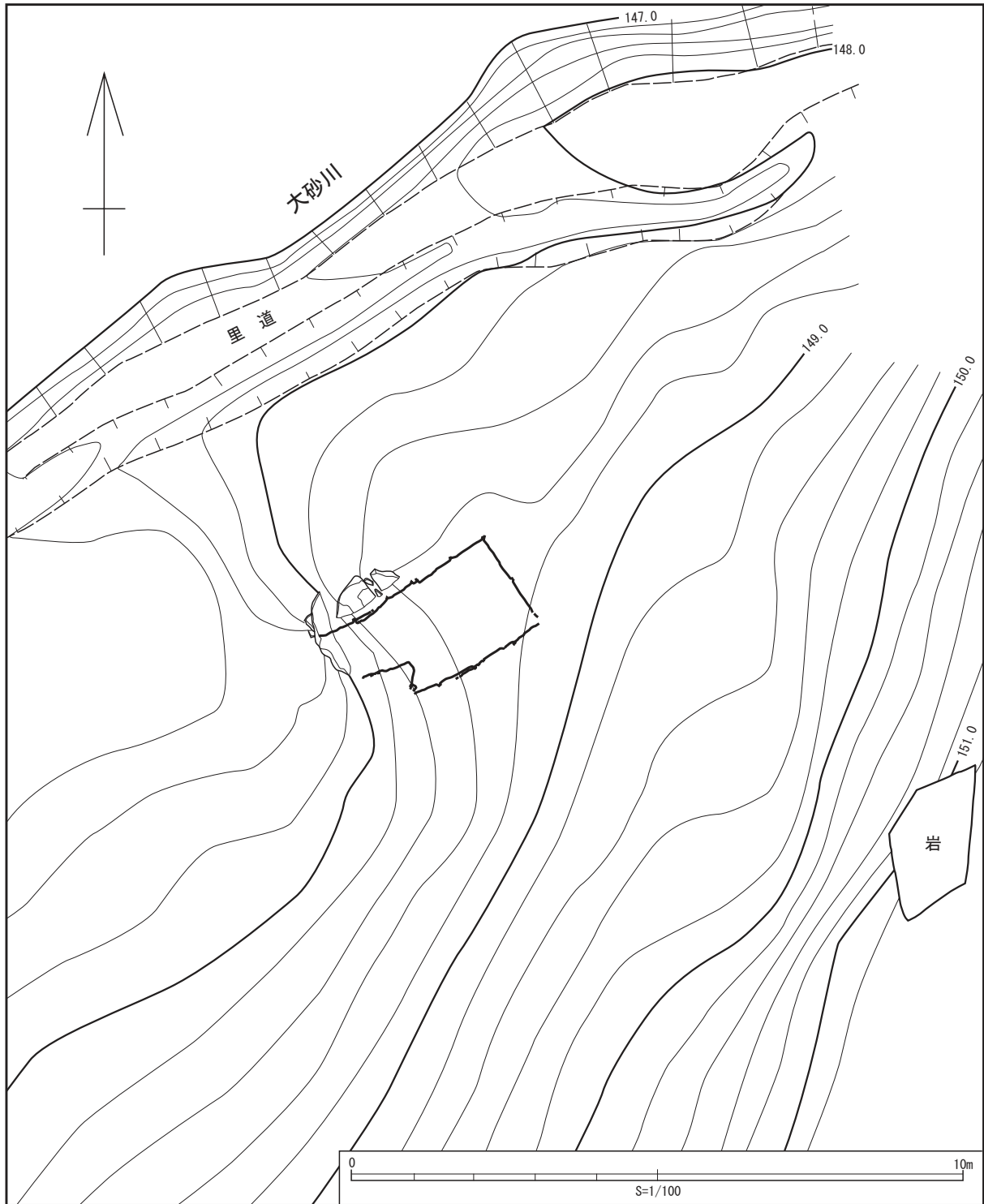


図5 岩瀨谷A2号墳墳丘平面図

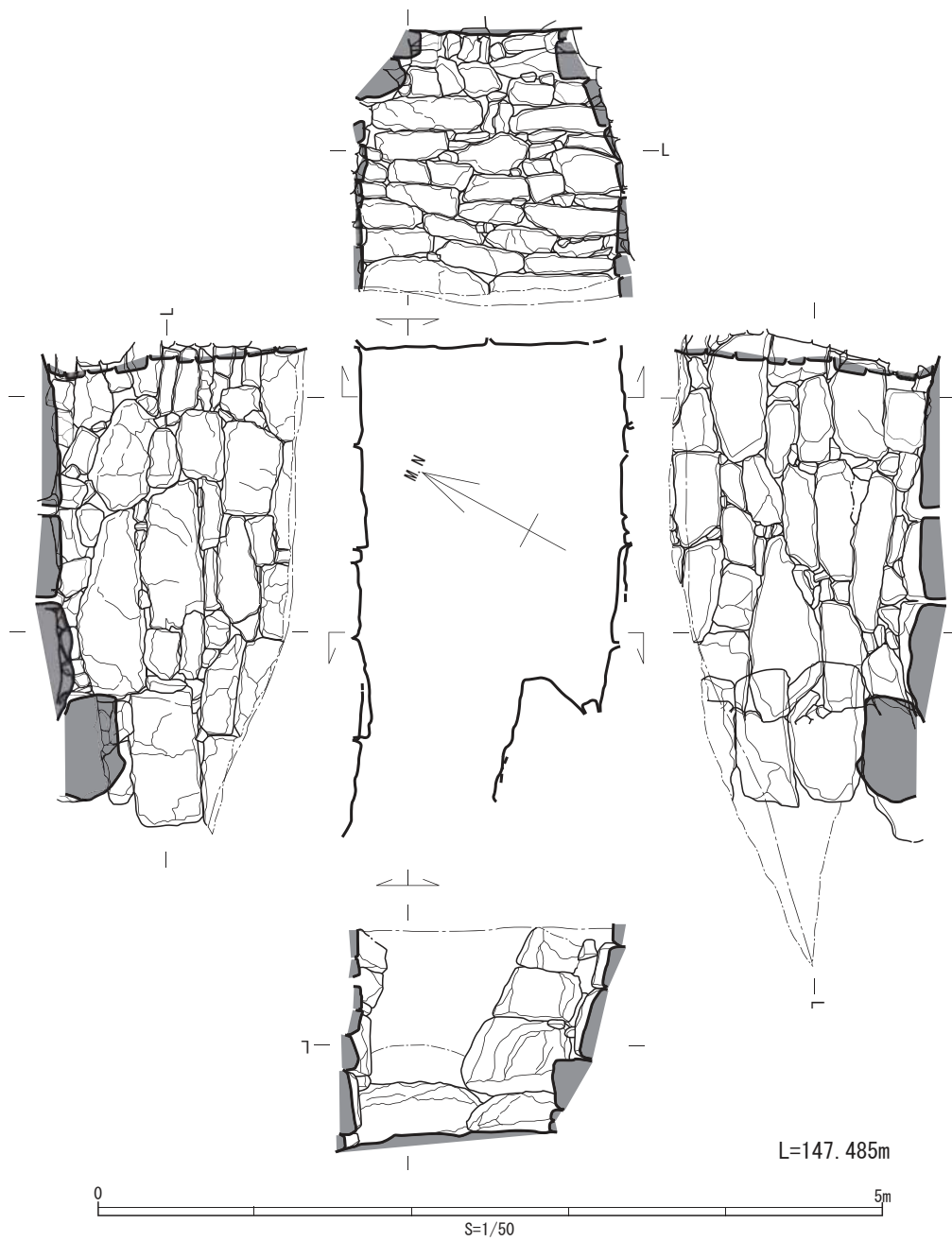


图6 岩瀬谷A2号墳石室実測図

編集後記

今回の紀要は、出土資料の紹介をはじめ、遺跡および遺構の新たな評価や再検討など多彩な内容となっています。これらには、近江の独自性が垣間見えるとともに、幅広い交流の歴史が反映されているようです。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っています。

(編集担当)

平成21年(2009年)3月

紀 要 第22号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel.077-548-9780(代)
<http://www.shiga-bunkazai.jp/>
E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 (株)同朋舎